

課題達成対話の基盤化を実現する言語・非言語情報の多重指向性

岡本 雅史

立命館大学

Abstract: Clark(1996) insists that language use is a species of joint action, composed of multiple layers of activity. In this paper, from cognitive-pragmatic observation of task-based dialogues of the LEGO task (Clark & Krych, 2004), I point out the evidence of multiple verbal/nonverbal involvement of each participant in both of a communicative layer and an action layer, and examine how such multiple involvement should be summarized as one “joint activity” through the formation of common ground. To describe this process appropriately, I present a tentative model which might be possible to unify Clark’s joint activity theory and the utterance event model of Sakita & Okamoto(2010).

【キーワード】: 基盤化、共同行為、多層化、発話事態モデル

1. はじめに

本稿では、英語母語話者と日本人英語学習者、及び学習者同士の課題達成対話 (LEGO タスク) の観察から、基盤化形成において参加者による複数の異なる場への指向性が見られることを指摘し、そうした多重の関与がどのようにして一つの共同活動 (joint activity) として纏め上げられているのかを適切に記述するモデルを認知語用論の観点から提案することを目的とする。

観察の結果、本 LEGO タスク (Clark & Krych, 2004) において教示者と作業者は、会話を交わす《コミュニケーションの場》とブロックを組み立てる《共同行為の場》という複数のレイヤーにさまざまな言語・非言語的手段を用いて重層的に関与していた。そこで、基盤化におけるこうしたマルチモーダルな多重指向性を適切に捉えるため、Clark(1996) の共同活動理論を崎田・岡本 (2010) の発話事態モデルと接合することにより、言語情報のみならず非言語情報も含めた新たな認知・相互行為モデルを提示する。

2. 理論的背景

2.1. 会話における共有基盤

Clark(1996) は、言語使用が常に話者の意味と聞き手の理解の協調に基づいた「共同行為 (joint action)」であるという立場を標榜し、そうした共同行為の達成に「共有基盤 (common ground)」が必須であることを指摘している。

Clark 自身の元々の共有基盤概念は定指示 (definite reference) のモデルとして提案されたものであるが、

彼の考えを敷衍するならば、共有基盤とは、コミュニケーションの参加者が協働的に構築し、互いの発話や行為の生成・理解のリソースとする共有情報 (知識・信念・想定) であると考えられる (Clark & Carlson 1981, Clark 1996)。

この共有基盤を定式化することはその再帰的な性質上非常に困難であるが、実際の相互行為場面を観察する上で重要なのは、以下に挙げる共有基盤が確立していることを保証する 3 タイプの証拠である (Clark & Carlson 1981: 69-71)。

物理的共在 (physical co-presence)

実際に話し手と聞き手が同じ空間に居て、互いが同時に経験を行っていることをほぼ確実に意識している状態

言語的共在 (linguistic co-presence)

話し手が聞き手が知らない対象について明示的に言及することで、シンボリックにその対象を両者と共在させている状態

共成員性 (community co-membership)

話し手と聞き手の両者が参加している何らかのコミュニティ内で既知の情報は、両者にとっても当然既知であると考えられること

本稿で取り扱う LEGO タスクでは、教示者と作業者の間に置かれている衝突の有無によって物理的共在が変化していることがポイントとなる。

2.2. 共同行為における多層化



図 1: 多層化

一方 Clark(1996) では、共同行為の一種とみなされる会話がしばしばそれが複数のレイヤーから構成されることが指摘されている。これは Bateson(1972) のごっこ遊びの観察や Goffman(1974) のフレーム分析等に基づいたものである。例えば、幼稚園児の息子が父とヒーローごっこで遊んでいる場合は、現実世界においては親子がおもちゃの武器でごっこ遊びを行っているが、仮想世界ではヒーローと怪人として本物の武器で戦っている。このとき、図1のように現実世界としてのレイヤー1を基礎としてその上に別のレイヤー2が仮想世界として構築されることになる。こうした複数のレイヤーが会話の中で構築されることを Clark は「多層化 (layering)」と呼び、ストーリーテリングやアイロニーや皮肉、からかい等に至るまで、そうした多層化が広範に生じていることを述べている。

このとき、この多層化の基礎となるレイヤー1を現実のコミュニケーションが生じている場としての《現実世界》、レイヤー2を参加者が共同で構築する仮想的な場としての《仮想世界》、と一般化するならば、ごっこ遊びのような参加者自らが複数の役割を担うようなある種の演劇的な共同行為以外においても、会話は言語的・非言語的手段を用いて複数のレイヤーを有すると考えることができる。本稿での問いは、LEGO タスクのような課題達成対話における多層化とは何であるか、そして各参加者は各々のレイヤーに対してどのような手段を用いて関与しているのか、という点にある。

2.3. ジェスチャーの自己指向性

LEGO タスクにおいては教示者・作業者ともに頻繁にハンドジェスチャーなどの非言語的振る舞いを行っていることが観察される。通常は、ジェスチャーは聞き手の発話理解を助けるために行われると考えられているが、例えば相手に自分の姿が見えない電話会話においても人はしばしばジェスチャーを行うことが知られている (Bavelas, Gerwing, Sutton, & Prevost, 2008)。また、先天的盲児が盲の聞き手に対してジェスチャーを行うという報告もある (Iverson & Goldin-Meadow, 1998)。その意味で、ジェスチ

ャーは他者に伝達するために行われるだけではなく、話し手自身の発話生成においても利用されるという自己指向性を持つと考えられる。

しかしながら、自己指向的なジェスチャーにコミュニケーション的な志向性が全くないかと言えば、そうとは限らない。例えば、発話中に生じるフィラーは一般に自己指向的なものと捉えられることが多いが、川田 (2008) は会話中のフィラーの観察から、話し手の意図とは無関係に表出される自己指向的な「現れるフィラー」と、話し手が自身で表出した現れるフィラーの性質を利用して聞き手に特定の意図を伝達する他者指向的な「使われるフィラー」の二種類を区別している。つまり、自己指向的なジェスチャーはそれが生起する時点においては話し手自身の無意識的な表出であったとしても、それが表出されることで話し手にとっても聞き手にとっても利用可能なコミュニケーションリソースとなるのである。

3. 課題達成対話の基盤化形成

以上のような理論的背景を元に、本稿では課題達成対話においてどのような手段を用いて基盤化が達成されているかを分析する。データとして用いたのは、英語母語話者と日本人英語学習者、及び学習者同士が LEGO ブロックを使用しながら特定の課題を遂行する場面の映像・音声データである (谷村・吉田, 2017)。具体的には作業者が教示者の口頭での説明に従って LEGO ブロックを積み上げ、教示者の想定する形と一致することがゴールとなる。各々の対話は衝立によって相手の手元が見えない場面と、衝立がなく手元が見える場合の二条件下で収録されている (図2)。



図 2: LEGO タスク：衝立なし (左) / 衝立あり (右)

これらのデータを観察した結果、LEGO タスクには2つのレイヤーがあることが明らかとなった。一つは、LEGO ブロックの場としての《作業空間》であり、もう一つは教示者と作業者の《コミュニケーションの場》である。共同行為としての LEGO タスクはこの二つのレイヤーによって多層化され、参加者はそれぞれのレイヤーに視線・手・言語を用いて関与しながら課題達成を行っていることが観察さ



図 3: 課題達成会話の多層化

れる(図3において破線は言語、点線は視線、実線は手による関与をそれぞれ示している)。

3.1. 視線による場への関与の切り替え

LEGO タスクにおいて、基本的に作業者は手と視線によって《作業空間》に関与し、発話によって《コミュニケーションの場》に関与する。しかしながら、観察の結果、以下のような場合には視線移動によって《コミュニケーションの場》への関与に切替えが行われていることが明らかとなった。

(1) 視線移動による場への関与の切り替え

- a. 教師者の指示が停滞するとき
- b. 教師者の指示を自ら仰ぐとき
- c. 教師者の発話の意図に対する理解や承認を表明するとき

以下のトランスクリプトは衝立なし条件における作業者 Y と教師者 C の対話断片である。下線を引いた箇所が作業者の視線が教師者に向けられている部分となる。

- (2) 01 Y: e[h: small okay]
- 02 C: [small yep] in the middle uh yeah okay
yeah and then on both si[des] small blue piece
- 03 Y: [uhn] okay yes
- 04 C: yea and then on both sides of that
- 05 Y: uhn
- 06 C: a yellow and a red piece
- 07 Y: small?
- 08 C: yep
- 09 Y: okay
- 10 C: at th[e end]
- 11 Y: [uh:] whi- which is yellow? which side is-
- 12 C: u:m I guess it doesn't matter
- 13 Y: oh okay
- 14 C: yea
- 15 Y: a:h cuz it's the same? Hhh
- 16 C: yea hhh
- 17 Y: okay like this okay

02、05、12の下線部では作業者が教師者の指示が若干停滞したため、指示や回答を待つために視線を作業者に向けており、11の下線部では作業者自身が発話しながら教師者の指示を仰いでいる。そして13

では教師者の発話に対する承認を表明し、15では教師者の発話の意図に対する理解を表明している。

注目すべきは、いずれの場合も共同行為が円滑に進行していない場面であり、その微細なトラブルを「修復」(Schegloff, Jefferson, & Sacks, 1977)するプロセスと考えることができる。つまり、視線による暗黙的な修復開始が生じている。

3.2. 自己指向的ジェスチャーによる基盤化

次に同一作業者・教師者ペアによる衝立あり条件でのデータを観察した。この場合、教師者にとっては作業者の作業場面が見えないのであるが、観察の結果、衝立なし条件に比べ、教師者のジェスチャー空間が大きくなりジェスチャー頻度が顕著に増加することが判明した。そのジェスチャーの多くはゴールとなる LEGO ブロックの完成へと至るステップをなぞった形態となっている。

このことが示すのは、教師者のジェスチャーは単なる発話生成のための自己指向的なものではなく、ジェスチャーによって構築される仮想世界と実際の LEGO ブロックの場を一致させようという基盤化への志向が存在することである。先述したように、共有基盤を保証する一つの重要な条件として参与者の物理的共在がある。衝立あり条件においては基本的な物理的共在が達成されながらも、視覚的に参与者同士の共有基盤の一部が未構築の状態となり、その結果、作業者の《作業空間》としての現実の LEGO ブロックの場と、教師者が思い描く《仮想的なジェスチャー空間》を一致させようとする志向性が働いていると考えることができる(図4)。



図 4: ジェスチャーによる基盤化形成

3.3. 基盤化形成における承認発話

また、今回の分析データでは衝立の有無に拘らず、作業者・教師者のいずれもが頻繁に承認発話を行っていることが観察された。例えば先の(2)のトランスクリプトにおける太字部分がそれに該当する。02

では教示者は作業者の発話の一部を反復した直後と承認発話を行い、続けて「(それを)真ん中に…そう」という形で、新たな指示を行った直後に作業者がブロックを適切な位置に置いたことを目で確認してから承認発話を行っている。一方作業者は、教示者の指示に対して(05)、自身の疑問への教示者の回答に対して(13)、さらには作業者の承認発話に対する承認として(09,17)、承認発話を行っていると思われる。このように承認発話の向けられている対象や事態は先行発話における指示内容から相手の承認行為、さらには作業空間におけるブロックの適切な配置に至るまで多岐にわたる。

崎田・岡本(2010)は、認知語用論の立場から会話における聞き手の発話理解の諸相を考察し、聞き手による発話理解を「返答可能性」の問題として捉え、承認発話が先行発話の何を承認しているのかを論じている。例えば、友人同士が会話していて、一人が「昨日枕元に幽霊がいてさ」と話しかけた際、相手が「うん」と短い返答を返した場面の承認対象は、(i) 昨日話し手の枕元に幽霊がいたという〈事実〉、(ii) 事実はどうあれ、枕元に幽霊がいたと話し手が感じたという話し手の〈認知〉、(iii) 話の真偽はさておき、話し手がとりあえず何らかの体験を聞き手に語ろうとしているという〈発話行為〉、といった複数の可能性があることを「発話事態モデル」(図5・左)を用いて示唆した(崎田・岡本, 2010:149)。

これに基づくと、共同行為においてはさらに、発話事態としてのコミュニケーションの場だけではなく、作業空間としての共同行為の場においても同様の多様な関係性へのコミットメントがあると考えられる。図5に示したとおり、参加者は発話やジェスチャー(ないしは手による操作)、視線といった複数の言語・非言語的手段によって、複数のレイヤーにそのつど関わっている。そして図中で点線で示したように各参加者がそれぞれ自身の立場を切り替えながら、その言語・非言語の表出が各レイヤーとしての場に内在する参与項間の諸関係にコミットする。

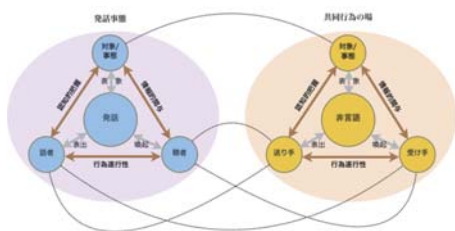


図5: 発話事態と共同行為の場の多層化

このように、共同行為場面では発話や視線、ジェスチャーなど様々なコミュニケーション・モダリティによって、場への関与の切り替えや基盤化を行っていると考えられることができる。

4. おわりに

本稿では課題達成対話における共有基盤構築についてLEGOタスクのデータ分析を元に検討した。結果として、共同行為としてのLEGOタスクにはLEGOブロックが組み立てられる《共同行為の場》と、教示者と作業者が会話を交わす《コミュニケーションの場》という複数のレイヤーが存在することが分かった。各レイヤーに対して両参加者はマルチモーダルな手段を用いて関与している。つまり、発話だけでなく、視線やジェスチャーなどが異なる場への関与と参加者の指向性を暗示しているのである。例えば、視線移動は一種の修復として共同行為の円滑さを調整し、教示者の自己指向的ジェスチャーは現実の作業空間とジェスチャーによる仮想空間の一致を志向する。そして、承認発話は多義的に複数の場への関与を示している。

この結果が示唆するのは、基盤化形成において共有基盤が実際に参加者間で構築されているか否かではなく、むしろ参加者が共有基盤を構築しようとする姿勢や志向性こそが重要であるということである。

参考文献

- Bavelas, J. B., J. Gerwing, C. Sutton and D. Prevost. 2008. "Gesturing on the Telephone: Independent Effects of Dialogue and Visibility." *Journal of Memory and Language* 58, 495-520.
- Clark, H. H. 1996. *Using Language*. Cambridge, Mass.: Cambridge University Press.
- Clark, H. and T. B. Carlson. 1982. "Hearers And Speech Acts." *Language* 58, 332-373.
- Clark, H. H. and M. A. Krych, 2004. "Speaking while Monitoring Addressees for Understanding." *Journal of Memory and Language* 50(1), 62-81.
- Iverson, J. and S. Goldin-Meadow. 1997. "What's Communication Got to Do with It: Gesture in Blind from Birth Children." *Developmental Psychology* 33, 453-467.
- 川田 拓也. 2008. 「ポスター会話におけるフィラーと視線の同期について」、『京都大学言語学研究』27, 151-168.
- 崎田 智子・岡本 雅史. 2010. 『言語運用のダイナミズム—認知語用論のアプローチ』、東京：研究社出版.
- Schegloff, E. A., Jefferson, G., and Sacks, H. 1977. "The Preference for Self-correction in the Organization of Repair in Conversation." *Language* 52(2), 361-382.
- 谷村 緑・吉田 悦子. 2017. 「課題達成対話における日本人英語学習者の基盤化形成とジェスチャーの同期」、『日本語用論学会第19回大会発表論文集』11.